

熏風

教育委員会だより

第十号

平成三十年二月十五日(木)

河内長野市教育委員会

根付き始めた小さな文化 ～スポーツ文化の芽生え～

昨晚、平昌冬季五輪をテレビ観戦しました。

スピードスケート女子 1500mの高木美帆選手が銀メダル、ジャンプ女子ノーマルヒルの高梨沙羅選手とフリースタイルスキー男子モーグルの原大智選手がそれぞれ銅メダルを獲得しました。

高木選手は8年前、高梨選手は4年前の雪辱を果たし、惜しくも金メダルには届かなかったものの、この間の努力が報われるメダル獲得となり、感動を覚えました。

両選手とも競技を始めたきっかけは、小さい時から周りの地域の子どもたちが、遊びの一つとしてスケートやジャンプに親しみ、兄弟姉妹も同じ競技をしていたためです。周囲の環境が、当たり前のように競技を始めるきっかけとなったようで、地域に根付いた文化がそうさせたものかもしれません。その後、本人の努力はもちろんですが、家族や学校の先生をはじめとする指導者など周囲のサポートがあり、今回、実を結んだものと思っています。

さて、「子どもの体力低下」が課題となって久しい感がありますが、文部科学省の「子どもの体力の現状と将来への影響報告」では、以下の4つをポイントとして示しています。

1. 子どもの体力・運動能力は、昭和60年ごろから現在まで低下傾向が続いている。また、運動する子どもとしない子どもの二極化が指摘されている。
2. 体を思うとおりに動かす能力の低下が指摘されている。
3. 肥満傾向の子どもの割合が増加しており、高血圧や高脂血症、将来の生活習慣病につながる恐れがある。
4. 体力の低下は、子どもが豊かな人間性や自ら学び自ら考える力といった「生きる力」を身に付ける上で悪影響を及ぼし、創造性、人間性豊かな人材の育成を妨げるなど、社会全体にとっても無視できない問題である。

このような状況の中、本市教育委員会では、市内の関係団体と連携・協力し、小学生の体力向上のため、「走る」・「投げる」・「跳ぶ」をテーマに、駅伝大会（主催：市スポーツ推進委員会）、ドッジボール大会（主催：河内長野 JC）、ロープジャンプ大会（主催：市総合スポーツ振興

会)を実施しています。

ドッジボール大会は12年前から、駅伝大会は5年前から、ロープジャンプ大会は4年前からの実施となりますが、3大会が揃った4年前から見ますと、各大会の参加者は年々増加傾向となり、盛大になっています。

この大きな要因は、各学校で、「走る」・「投げる」・「跳ぶ」の要素を取り入れた取組みを行っていたことがあるかもしれませんが、実際に参加した保護者や子どもにお聞きしますと、これらの大会が毎年恒例で開催される中で、年少の子どもたちが、年長の子どものたちあるいは兄弟に、大いに刺激を受けていることを感じます。

それぞれの大会に出場する際に、先輩達が、一生懸命、練習に取り組む姿や大会で活躍する姿を目の当たりに観て、自分たちも同じように大会に出場したい、そして、出場するからには、先輩達以上の成績を残したいという気持ちが働いているように思います。

この現象は、大袈裟かもしれませんが、スポーツを通じた人材育成の小さな“文化”が根付きはじめているように感じます。

本市教育委員会では、この数年間、「ふるさとのつながりによる豊かな学び～輝く人づくりのために～」を基本理念として、地域総ぐるみで子どもたちの育成に取り組んできました。

その成果として、学校現場では、問題行動の減少の点が評価されています。

スポーツの分野では、その成果を評価することは困難な点がありますが、これらの体力向上の取組みを“地域総ぐるみ”で継続実施していく中で、根付き始めた“小さな文化”を大切に育みたいと思います。

そして、一人ひとりが、それぞれの強みを活かし、社会で輝く人になってほしいと願っています。

(文責：文化・スポーツ振興課長 森井 啓之)